
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究—トランスナショナルなネットワークと現地の応答」

2022 年度第 2 回研究会（通算第 7 回目）

日時：2022 年 12 月 4 日（日）14:00–17:30

場所：ZOOM 会合

概要：2022 年 12 月 4 日（日）に 2022 年度の第 2 回の研究会を実施した。当日は慶應義塾大学の新井和広氏が「ルトゥフィー・ビン・ヤフヤーとインドネシア社会：宗教者としての活動・思想を中心に」、同じく慶應義塾大学の錦田愛子氏が「パレスチナをめぐるイスラーム主義運動のトランスナショナルな諸相」と題してそれぞれ研究報告と、それに続く質疑応答をオンラインで実施した。

それぞれの報告内容の概要は下記の通りである。

題目：ルトゥフィー・ビン・ヤフヤーとインドネシア社会：宗教者としての活動・思想を中心に

新井和広（慶應義塾大学）

ムハンマド・ルトゥフィー・ビン・ヤフヤー（ハビーブ・ルトゥフィー）はジャワ中部のプカロンガンを拠点に活動するアラブ系宗教者で、インドネシアのナフダトゥルウラマー（NU）系タリーカに大きな影響力を持っている。彼の説教や講演は一般信徒にも理解できる語句や身近な事例が使われていることから若者も含む多くの人々から支持を得ている。また政治家や軍、警察との親密な関係も（本人は否定するが）たびたび指摘されており、2019 年からは大統領評議会（Wantimpres）メンバーにもなっている。

ハビーブ・ルトゥフィーの出自はハドラミー・サイイド（ハドラマウトに定着した預言者一族）のビン・ヤフヤー家である。しかしジャワ在住の他のハドラミー・サイイドとは異なり、彼の一族の学識者に加えてジャワ人の宗教者からタリーカの修行方法を伝達されている。彼がプカロンガンに設立したマジュリス・カンズッサラワートで実践するのはマグリブ起源のタリーカ、シャーズィリーヤである。彼はハドラマウトのタリーカであるアラウィーヤの流れも汲んでいるが、宗教書の勉強会や講演においてハドラマウト性を特に強調することはない。カウボーイ・ハットを被った姿のポスターが出回ったり、絵画や楽器（キーボ

ード)演奏が趣味であったりと、ハドラミー・サイイドの宗教者の中では「変わり種」とも言える。

むしろハビーブ・ルトゥフィーを特徴づけているのはインドネシア共和国へのこだわりである。各地での講演においてもインドネシアの統一 (NKRI) や愛国心の重要性を解き、それを信仰とからめて語っている。またワリ・ソンゴ (九聖人) は5世代にわたって9人ずつ現れたとするなど、一般的な学説とは異なる独特の歴史観も持っている。

しかし発表者がハビーブ・ルトゥフィーに聞き取りを行った時に見たのは、プカロンガンにおけるビン・ヤフヤー家の地位を確立しようとする姿だった。プカロンガンのアラブ系で宗教的の最も有名なのはアッタース家であり、20世紀初めに死去したアフマド・ビン・アブドゥッラー・ビン・ターリブ・アル=アッタースの聖者祭が現在まで開催され、地域の有名な宗教行事のひとつとなっている。それに対して2000年代以降ハビーブ・ルトゥフィーもプカロンガン近郊にあるビン・ヤフヤー家メンバーほかの墓の上に廟を建設し、聖者祭も開催している。ジャワにおけるビン・ヤフヤー家の宗教者の中で最も有名になったのがルトゥフィーであり、今後は彼を中心にビン・ヤフヤー家の宗教的権威が構築されていくと考えられる。

(以上、終わり)

題目：パレスチナをめぐるイスラーム主義運動のトランスナショナルな諸相

錦田愛子 (慶應義塾大学)

中東に端を発するイスラーム主義の過激派ネットワークの展開は、21世紀に入り国際的に大きな注目を集めた。その嚆矢となったのは2001年にアメリカで起きた「9.11」事件である。アル=カーイダによる攻撃は、その入念かつ緻密な計画ばかりでなく、国境を越えてアメリカ本土を標的としたことで大きな脅威を与えた。だがより重要なのは、その創設の動機がアメリカおよびソ連による中東への軍事展開だった点にある。それに続きトランスナショナルなネットワークの威力をさらに見せつけることになったのは、「イスラーム国」であった。「イスラーム国」もまた、アメリカによるイラク攻撃の影響でその前身組織が作られ、当初はイラクとシリアをその名前に含むローカル組織であったが、後に国際的なネットワークに基づく運動組織へと発展した。彼らは活動 (攻撃) 対象もアメリカ、ヨーロッパ、アフリカと広範囲を含め、世界各地に支部を拡大することで、グローバルな運動のネットワークを構築した。

他方で中東では同じイスラーム主義組織の中にも、イスラエル・パレスチナ紛争における抵抗運動組織としてのハマースやイスラーム・ジハードなど、組織が存在する地域内に限定された活動目標を掲げる組織が多く存在する。ハマースはイスラエルによる占領からのパレスチナの解放を目標に掲げており、その基本方針は、第一次インティファダというパレ

スチナの占領地内での抵抗運動を基盤に組織されて以降、現在に至るまで揺るいでいない。同じパレスチナでやや先行して組織されたイスラーム・ジハードも、同様の主張を掲げる。これらはいわばローカルな主張を掲げた組織と位置付けることができる。

同じイスラーム主義組織でありながら、一方でトランスナショナルなネットワークを基盤として世界各地で攻撃対象を選択する組織が存在し、また他方でローカルな活動に専念し続ける組織が存在するのはなぜか。本研究ではその理由を、それぞれの組織が形成された時期の政治的背景に見いだせると考え、検討を行った。すなわち、ローカルな活動に従事する組織が、20世紀的な一定地域に対する入植や占領への抵抗運動として形成され、それらを主要な問題として捉え続ける（これを「20世紀型」と仮称する）一方、トランスナショナルなネットワークで活動を展開する組織は、冷戦崩壊期以降に起きた大国の軍事介入をイスラーム世界全体にとっての問題と捉えて活動を展開し始めたため、双方の主張や運動形態が異なる（これを「21世紀型」と仮称する）のではないか。

本報告ではこうした仮説に基づき、ハマースを中心に運動の特徴や、二つの型の組織間の相互作用などについて検討した。その結果、基本的にはローカルな運動が中心で「20世紀型」に分類されるハマースだが、組織幹部の安全を確保するため国外に拠点を移動させたり、武装闘争の展開のためにトランスナショナルな武器供与のネットワークに依存している側面などが指摘された。また「21世紀型」の典型ともいえる「イスラーム国」との組織間の関係はあまり良好とはいえないものの、シナイ半島での武器の運搬などでは、両組織の間で協力や黙認という姿勢が取られていることが分かった。ここからは「20世紀型」と「21世紀型」の組織の間には場合に応じて連携がみられ、本来は相容れない主張をもつはずの組織間でも関係が断絶しているわけではないことが確認された。

報告後の質疑応答では、イスラーム主義組織の間でスンナ派とシーア派という宗派の違いはどのような意味合いをもつのか、といった点についての質問や、インターネットの普及でSNS等を利用して運動が過激化しやすい傾向があるのかどうかについて質問が出た。またイスラーム主義組織の分類について、明確な二分法で分けるのではなく、それぞれの組織のもつローカルな側面とトランスナショナルな側面、穏健さと過激さ、その状況や段階ごとの変化などを明示できる整理方法の工夫が必要なのでは、といったコメントが出された。「イスラーム主義」と「ジハード主義」など分析用語のより適切な使い方についてもコメントが出され、非常に有意義な議論となった。

（以上終わり）